

集してきた。が、板碑研究や鬼子母神と子安信仰など、三輪が大きな業績を残した学問領域は、私のまったく疎いところであって、残念ながら、いま、多くを語ることは出来ない。それで、三輪の全業績についての評論は後日を期することゝし、また、紙数の関係もあろうから、こゝでは、「武藏古瓦行脚雜記帳」に焦点を絞り、その概要を紹介するほか、同帳に収載された神奈川県内唯一の古瓦出土地である影向寺を中心に、その仕事を紹介してみたいと思う。他の一編、「下総国分寺踏査記」については、別の機会に紹介する。

二

先ず、「武藏古瓦行脚雜記帳」と題する自筆備忘録であるが、同帳は、縦24.8cm、横16.8cmの大きさで、袋綴じ二四丁である。最初の一丁は、内表紙として白紙で、すでに紹介した六角印が捺印されているばかりである。最後の一丁も裏内表紙の意味か白紙である。拓本あるいは図面（見取り図）などの折り込みないし貼り込みが三五枚ある。写真も添付されている。綴じ込まれた東京三越製の用箋には、カーボンによる複写が行われているが、一般には墨書されており、朱書きの注などが加えられている。

三丁目からが備忘録であって、まず、三輪が確認した武藏国内に於ける一四ヶ處の古瓦出土地の地名が記載され、さらに「武藏古瓦発見地図」が折り込まれている。同図は、江戸川、中川、荒川、多摩川の諸河川を水色の絵具で書き込み、最寄りの鉄道路線を加え、赤ドットで発見地を標示（麹町区の分は未記載）したものである。その「武藏古瓦発見地名表」を転載すると、

武藏古瓦発見地名表

地名	種類	推定年代	遺蹟ノ種類
北多摩郡国分寺村字国分	布目、巴、唐草、	奈良朝	寺址
国分寺旧址	文字瓦、		
北多摩郡国分寺村恋ヶ窪羽根沢	布目、唐草、	奈良朝	寺址
仮楽園	文字瓦、		
北多摩郡国分寺村字金仏堂	布目、巴、唐草、 文字瓦、	奈良朝	寺址
北多摩郡府中村字京所薬師堂	布目、巴、唐草、 文字瓦、	奈良朝	寺址
橘樹郡宮前村影向寺	布目、巴、文字瓦、 唐草瓦、	奈良朝	寺址
比企郡龜井村大字泉井字新沼谷	布目、巴、唐草、	奈良朝	（国分寺瓦）

三輪善之助と向影寺出土瓦(杉山)

及ビ字金沢	文字瓦、		窯址
南多摩郡稻城郡（村の誤記）大	布目瓦、	奈良朝	窯址
字大丸字城山及ビ瓦ガイト			
大里郡寄居町大字末野	布目、文字瓦、	奈良朝 (国分寺瓦)	
			窯址
北埼玉郡埼玉村大字埼玉字下埼玉	布目、唐草瓦、	奈良朝	寺址
盛徳寺内			
入間郡東金子村字小谷田及字新久	布目、巴、 文字瓦、	奈良朝	寺址
入間郡勝呂村大字石井字下石井	布目、巴瓦、	奈良朝	寺址
勝呂小学校内			
入間郡毛呂村毛呂本郷臥竜山	布目、巴瓦、	足利期	寺址
出雲伊波比神社内			
荏原郡大井町字滝王寺	布目、	藤原期	寺址
東京市麹町区丸の内	巴瓦、	徳川時代	邸宅

とある。東京市麹町区丸の内（千代田区丸の内）や入間郡勝呂村大字石井のように、江戸期あるいは室町期の瓦出土地も含み、比企郡亀井村や入間郡東金子村例のように、異なる字に所在する古瓦出土地を一括しているものもあるが、取敢えず、原表のまゝに整理すると、一二ヶ処が奈良・平安朝期の古瓦出土地及び窯址とされている。その一二ヶ処のうち、寺院址は八ヶ所、窯址が四ヶ所である。一四ヶ処を郡別に見ると、多摩郡に四ヶ処（国分寺村 府中村）、入間郡に三ヶ処（東金子村 勝呂村 毛呂村）、比企郡（亀井村）、橘樹郡（宮前村）、大里郡（寄居町）、北埼玉郡（埼玉村）、南多摩郡（稻城村）、荏原郡（大井町）、東京市（麹町区）に各一ヶ処となる。多摩郡国分寺村の三ヶ処のうちに武藏国分寺址が含まれていることはいうまでもない。さらに、これらの一四ヶ処の古瓦出土地について、各出土地ごとに、出土古瓦と見聞した事項が記録されているわけであるが、例えば、比企郡亀井村大字泉井字金沢及字新沼谷の項を引用してみると、

東上線坂戸駅から玉川町行の馬車に乗って途中入間郡苦林（ニガバヤシ）で小型の瓢墳円墳数十基を見かけました、墳上には皆葺石があって石柳の露出したのも見えます、其傍の善能寺には建武三年外沢山の板碑がありました、亀井村から徒歩い泉井に入ると右手に見える金沢寺の南側桑畠には布目瓦と土器片が沢山散乱してみます、此寺には嘉慶二年と康安二年の板碑がありました、猶進んで新沼谷の丘の裾に窯址があって布目瓦、磚並に祝部土器の様な鼠色の破片が焼土に交って無数に出ます、村人の話では嘗て此丘に男一人立ち得る程の穴が

あつた由それは瓦窯であります、

此窯址から発見した巴瓦唐草瓦并に播羅、入間、秩父等の文字瓦は国分寺旧址から発見さるゝものと同じであつて考古学雑誌六の四に対照すればよく判明します、

又豊由島と篆書きした瓦が出ました、之れは豊島の古い書き方であります、

横見の刻印ある瓦は私共が国分寺村で拾つたのと全然符合します

以上の証拠で此地は国分寺瓦の製造地なりと断言することが出来ます、

此村でも稀に石器が発見せらるゝそうでした、

とメモは入念である。また、国分寺址出土の古瓦と符合し、従つて、「此地は国分寺瓦の製造地なりと断言することが出来ます」という三輪の理解も添えられていて参考になる。北多摩郡府中町字京所の項では、荏原の文字瓦を採集したといふ、住田正一のいう普門寺址に該当すると想定し、朱書きして、「此地武藏国分尼寺址として最信するに足れり」と記してもいる。入間郡東金子村字新久及字小谷田や同郡勝呂村大字石井字下石井の項には、東光寺や宗福寺境内に所在する板碑が紹介されてもいる。

昭和三年一月に発表された「武藏野の古瓦」(『武藏野』11-1)は、この備忘録に基づいて作成されたものである。その冒頭に、

数年前に畏友春永政氏と共に武藏各郡を踏査して、国分寺以外に幾多の未知の布目瓦発見地のあることを知り、奈良朝から足利時代頃までの遺跡のあるを確め得た。故に私のノートから左にこれを列挙する。

とあることから確かである。同稿では、東京市麹町区例を省き、児玉郡青柳村字寄島、南多摩郡堺村相原、同郡元八王子村梶原八幡神社、入間郡山口村勝樂寺、西多摩郡三田村御嶽神社例を加え、武藏国内一八ヶ處の古瓦出土地を紹介している。児玉郡青柳村字寄島例など、「武藏古瓦行脚雑記帳」に見えず、「武藏野の古瓦」に増補された古瓦出土地は、当然、大正一二年六月以降の調査によって追認されたものと考えられる。その五ヶ處のうち、南多摩郡堺村相原や西多摩郡三田村御嶽神社例については、「武藏野の古瓦」発表以前に、『武藏野』に関連する記事が掲載されている。例えば、相原例に関する記述を引用してみると、「武藏野の古陶窯」(『武藏野』8-4 大正15年9月)に、

武藏南多摩郡堺村相原谷戸にも、祝(部字脱)土器の窯址が残つてゐる。此地は八王子の南方相原駅の附近で、トンネルの上の山の辺りに祝部土器が掘出される。尚同地の原巳之助氏宅の裏の崖からも、祝部土器の破片と、布目瓦が出る此瓦も、矢張り武藏国分寺へ寄附のものと思はれる。

以上の三ヶ所の祝部土器製造遺跡は、相互に共通した特徴がある。即ち発掘さるゝは多量破片のみなること、但偶々完品に近きものあるも、曲り、歪み等ありて、所謂ハネ物に属すること、往々数枚の土器の重ねたるゝ凝結して掘出さるゝこと、依て之等の遺物は自ら其地の竈址たることを説明するものである。又同時に布目瓦の発見せらるゝは其地が、土質、水利、窯場の位置等に於て、瓦の製造に適當してゐた為、国分寺建立の際に、瓦の製造所に充てられ、恐らく其後も窯業を営んだものと想像せられる。

とある。「三ヶ所」とあるのは、他に大里郡寄居町例と比企郡龜井村例にも言及しているからである。西多摩郡三田村御嶽神社例については、「御嶽山上の遺物」(『武藏野』10-1 昭和2年8月)がある。

が、『武藏古瓦行脚雜記帳』や「武藏野の古瓦」に記載された神奈川県内の古瓦出土地は、橋樹郡宮前村影向寺一ヶ所が記録されているばかりで、しかも、『武藏古瓦行脚雜記帳』の記述は極めて簡略である。すなわち、

考古学雑誌十三の二、武藏野五の三に拙稿があります、発見したのは巴瓦二種と都築の文字瓦であります、又附近の古瓦は国分寺と同じく奈良朝と思ひます、

とあるのみである。そして八葉の蓮華文軒丸瓦二種と平瓦破片(「都」の文字瓦か)の写真及び軒丸瓦の拓本写真が添付されているほかに、礎石と推定される「影向石」と呼ぶ大石の略図が添えられているものゝ、瓦の拓本は添付されていない。大石は、径五尺と六尺、厚さ二尺と計測され、中央部に径八寸と一尺の柱受けの孔が穿たれたものと記録されている。「武藏野の古瓦」に於ける記述は、後にふれる「影向寺の瓦」(『武藏野』5-3 大正11年12月)を承けて詳細になる。

三

その「武藏古瓦行脚雜記帳」の影向寺の記載のうち、「考古学雑誌十三の二、武藏野五の三に拙稿があります」とあるのは、「影向寺寺域発見瓦」(『考古学雑誌』13-2 大正11年10月)と「影向寺の古瓦」の二編を指す。備忘録は、大正12年2月から6月にかけての踏査の記録であるから、この二編が、同年の踏査に基づくものではなく、それ以前の調査によるものであることは確かである。『考古学雑誌』の記事はごく簡略であるから、『武藏野』の方の報告を引用すると、

春永政氏より多摩川西岸の古刹を探るから一緒にと誘引を受け初夏の風爽かに新緑相映する多摩川二子の清流を渡つた。

二子の町を西南に通り過ぎ溝ノ口から左折して台地に添つて南東に進むこと一里弱影向寺台に登ると布目瓦の落ちてゐるので目的地に着いたのを知つた。

寺は神奈川県橘樹郡宮前村に在つて天台宗威徳山影向寺と称し薬師堂鐘樓及庫裏等完備した閑寂な精舎である。……

境内は正しく南面し中央に薬師堂あり、其南西の鐘樓に徳川期の鐘が懸けてある、そして薬師堂の東北隅に銀杏の一巨樹が茂つてゐる、門前の東側にも大楓樹一株あり其根元に影向石と称ふる巾五尺長六尺厚二尺程の楕円形の石がある、中央に穴を穿つた様子から見ると古の礎石であらう、寺域には布目瓦の破片が広く散布して居るのと此礎石とから推して往古一大伽藍の在つたのを想像するに足るが勿論其配置なぞは不明である。

本坊に蔵する境内出土の巴瓦二種の内其一は雄健な単弁式蓮華紋の周囲に波紋を配し中房小さく七個の蓮子を置く、又他の一は波紋なき単弁蓮花紋に大なる中房あり十三個の蓮子を持ち武藏国分寺の奈良朝瓦に比較して遜色なき優品である。同じく寺内発掘の平瓦に都と篆書されたのは都筑郡を意味するものらしい、……

武藏国分寺は多摩川の北方約一里の地点にあり……、両寺其国宝の薬師仏を安置し、布目瓦文字瓦の手法さへ似たる事よりも武藏野の貴重なる史跡として此影向寺を保存したいものと思う。

とある。影向寺の状況を述べ、同寺に保存されていた軒丸瓦二点と「都」字の篆書きのある平瓦一点を観察したところを記し、さらに影向石の写真三葉を添えて詳細である。軒丸瓦等の寸法は記載されていないが、写真からはかなり大形の瓦であることが推察される。この原稿執筆の基になった三輪の影向寺踏査の日時は不明であるが、原稿執筆の日時が大正一一年五月一四日であり、「初夏の風爽かに新緑相映する」頃の踏査というから、この月の初旬か、前の月の下旬のことであるであろうか。前にふれた「武藏野の古瓦」の記述も大同小異であるが、「影向石」を「塔の中心礎石」と限定したことゝ、中房を小さく、七個の蓮子を配した単弁式蓮花紋軒丸瓦を「大和の飛鳥時代の巴瓦の模製」とし、一三個の蓮子を持つ軒丸瓦を「大和地方の奈良時代に流行した複弁式の感化をうけたものらしい」としたのが新味であった。

ところで、その三輪の踏査記の発表に先立つて、大場磐雄は大正七年九月から、影向寺への調査行を試みている。もっとも、この時点での大場の関心は、縄文時代の遺物散布地ということにあったようで、『樂石雜筆』にも、

九月二十九日 堀田、山内二氏と共に採集す。道順は目黒 祥雲寺山 下沼部 影向寺野川にして、……影向寺裏にて遺跡発見、石鎚採集。……

とあるばかりで、出土瓦あるいは寺院址に関してはまったく触れるところがない。この時には、山内清男を伴つての調査行であったらしい。同年一二月にも、大場は影向寺を訪れている。が、

この時に、古代伽藍の存在には考え及ばなかったのか、どうやら、「影向石」と思われる石についても、「又ここに足跡の石ありてこれにたまりし水を目につければききめあり」というなどと記録するにとどまって、礎石との指摘はない。大正一一年一〇月に至って、漸く、「畠中より境内へかけて採集す。布目瓦の採集物多し。……坂道を下るに飯塚蓮華紋ある巴瓦を得つ、喫驚してゆずりうけぬ」と、初めて古代瓦の出土に注目したかのようである。この軒丸瓦の発見を契機に、影向寺出土の古瓦に関心を寄せるようになったらしく、大正一二年二月にも影向寺に赴き、調査の結果を、『樂石雜筆』のなかで、「影向寺の研究」のタイトルでまとめ、古瓦と「影向石」に関して大分言及している。その部分を引用すると、

まず最初に寺内にゆき住職に逢い古瓦を見せて貰いたり。その数は巴瓦二個、平瓦完全一個破片数個、文字瓦破片一個なり。巴瓦の中一個は蓮弁卵形三重装飾ありて八個、子房不規則にて一三個、製作やや退歩的のところあり。色は淡黄褐色、一個はそれよりやや大にして蓮弁八個卵形各々葉に楔状線を現わす。子房は七個規則正しく、周囲にデイグザグ文様をめぐらす。外と文帶との間三分製作雄健色は薄墨色なり。文字瓦は灰色の平瓦の表面に都とへラ書きせるもの、都筑郡の意なるべし。その外格子文様、網形文様、縄目文様をあらはせる平瓦破片あり。又一個の平瓦破片には裏の布目を施せる部分に約一分の隆起帯を施せるものあり。蓋しひっかけの為に設けしにや。……

寺にカバンをおきて影向寺礎石を測定す。石質は蛇文岩の如し。蓋し塔の礎石か。

とある。この所見は、同年中に、「影向寺発見の古瓦に就いて」(『武相研究』3・5・7)にまとめられたらしい。同文献は、神奈川県立図書館などにも架蔵されておらず、今のところ閲覧出来ないでいる。さらに、『樂石雜筆』の大正15年の項には、「文様集成十六輯古瓦集中に、和田千吉蔵の古瓦あり、巴瓦の破片にて推定年代は奈良朝前期とあり」などと書き残し、古瓦のスケッチも添えて記録するなど、影向寺出土の古瓦への関心を持ち続けていた。

『文様集成』も未見であるが、後に引用する住田正一の記録から、同書が大正7年以前の刊行であることが確かであり、考古学研究者としては、早い時期に、和田千吉が軒丸瓦を所蔵していたことは明らかになる。たゞ、収集時の様子などは不明である。

大場と前後して、山中 瑟や上羽貞幸なども影向寺を踏査している。上羽は、大正10年頃と翌11年の終わりか12年の初めに影向寺に出掛けており、二度目の踏査は、集古会で山中や木村の話に触発されての影向寺行きであった。三輪の「影向寺寺域発見瓦」は読んでいたようで、影向石について、「足跡石の礎石なるべしといふ御説を賛同いたしました」などと書き残している(「遺跡巡りと影向寺」『考古学雑誌』13-6 大正12年5月)。また、石野瑛『武相の古代文化』(大正13年)に、大場採集の古瓦というものが紹介されているが、軒丸瓦二点と「都」字の篆書きのある平瓦片一点のうち、軒丸瓦は、大正11年10月以降の踏査で採集したものとし

て、平瓦は、三輪が報告している影向寺所蔵の一点のように見受けられる。石野は、「宮前村の影向寺は此の古道（律令制度下の東海道……引用者注）に近い一古刹で礎石及び古瓦が存して居る」といゝ、古代寺院址と指摘しているが、それには三輪や大場の報告が預かって力があつたことは疑いない。その「都」の籠書きのある平瓦は、田沢金吾「古瓦（奈良時代）」（『日本考古図録大成』16 昭和8年）にも収載されている。なお、同書には、神奈川県内出土の古瓦は、横須賀市公卿町の曹（宗）源寺や高座郡海老名村国分の相模国分寺の軒丸瓦も紹介されている。

四

武藏国分寺の古瓦は、早くから文字瓦が学界の興味を引き、篠原市之助「武藏国分寺古瓦に就きて」（『考古学会雑誌』2-7 明治31年11月）や沼田頼輔「武藏国分寺発見に係る文字瓦」（『考古界』1-1 明治34年6月）、野中完一の「武藏国分寺廃寺跡の文字瓦」（『考古界』1-8 明治35年1月）以下、多くの報告が発表されているが、影向寺出土の古瓦に関する本格的な紹介は、三輪の『考古学雑誌』や『武藏野』の報告を以て嚆矢とするかのようである。住田正一の「古瓦発見地名表」（『考古学雑誌』9-1 大正7年9月）の武藏国の項に、

影向寺

巴、 奈良 文 和田

とあるのは、前に引用した大場の文章に、「文様集成十六輯古瓦集中に、和田千吉蔵の古瓦あり」とある『文様集成』に依拠することが明らかであり、古瓦研究で名高い住田も、大正七年九月の段階では、影向寺を探訪し、出土の古瓦を実見してはいなかつたようである。この事実からしても、三輪の仕事は十分に注目されてよいように思うのである。